

当院の Brugada 症候群における ICD 不適切作動およびリードトラブルの対応について

鎌倉 令 岡村英夫 金山純二 上島彩子
廣瀬紗也子 大塚陽介 川上大志 船迫宴福
石橋耕平 中島育太郎 宮本康二 野田 崇
相庭武司 鎌倉史郎 草野研吾

【背景】Brugada症候群(BrS)における植込み型除細動器(ICD)合併症の頻度についての報告は散見されるが、個々の合併症についての詳細な報告は乏しい。【方法】BrSのICD植込み123例(男性118例, 初診時平均年齢 46.4 ± 12.4 歳, 心室細動(VF)既往:37例, 失神例:54例, 無症候例:32例)を対象として, 平均92.4カ月のフォローアップ期間中のICD合併症を検討した。【結果】フォローアップ期間中, 30例(24.4%)にVFによる適切作動を認め, 39例(31.7%)計61件に合併症(不適切作動:30, リード不全:15, 感染:11, その他:5)を認めた。適切作動は, 有症候例で有意に多く認められたが, 合併症の頻度は有症候, 無症候例間で有意差はなかった。洞性頻脈による不適切作動を4例に認め, その多くは若年者(平均年齢 33.5 ± 6.8 歳)の運動中に発生していたが, VF治療設定の変更で再発は認められなくなった。上室頻拍(AF/AFL/AT)はICD植込み123例中28例(22.8%)に認められ, そのうち11例(39.2%)に不適切作動が生じていた。それらは中年期に多く(平均年齢 57.3 ± 11.1 歳), 薬物療法のみでは不適切作動を繰り返したため, VF治療設定の変更やアブレーションを必要とした。リード断線は10例(うち不適切作動3例)に認められ, 植込み後平均 7.4 ± 2.6 年が経過した古いリードに多かった。感染はICD植込み手術, もしくは電池交換術後1年以内に6例, 1年以降の術後遠隔期に4例認められた。遠隔期の感染症例の全例が中~高齢者, または糖尿病を合併した例であった。【結論】BrSのICD症例はフォローアップ期間が数十年に及ぶことがあり, 長期間フォローアップ中の上室頻拍, リードトラブル, 感染への対策が今後重要になると考えられた。

Keywords

- Brugada 症候群
- 植込み型除細動器
- 不適切作動
- リードトラブル

国立循環器病研究センター心臓血管内科・不整脈科
(〒565-8565大阪府吹田市藤白台5丁目7番1号)

Management of Inappropriate Shocks and Lead Troubles of Implantable Cardioverter Defibrillator in Patients with Brugada Syndrome
Tsukasa Kamakura, Hideo Okamura, Junji Kaneyama, Ayako Kamijima, Sayako Hirose, Yosuke Otsuka, Hiroshi Kawakami,
Moritoshi Funasako, Kohei Ishibashi, Ikutaro Nakajima, Koji Miyamoto, Takashi Noda, Takeshi Aiba, Shiro Kamakura, Kengo Kusano